

叢 (くさむら)

叢 (くさむら)

合 同 詩 集
コロニア文学会

合同詩集

出 版 に 際 し て

横 田 恭 平

合同詩集「叢(くさむら)」は、生まれるべくして、生まれたものと言えよう。

この邦で、“詩”のこころを持ち続け、現代詩を書いている人たち、その人たちは、主に「サンパウロ詩話会」「スザノ詩話会」で、作品発表、批評、研究を行なっている。

詩史的にみて、その人たちによって詩が書かれている台木時代

ともいうべき時代は終わり、いまや、より広汎な領域で、詩が読まれ、愛される時代の到来が予想されるようになった。

また一方に、作者たちの生きてきた一つの新しい社会の形成期、動擾と哀歎に盈ちたその時期に於ての、思想、感情を直裁に表白した作品群が、時の経過とともに、あたら散逸してしまうおそれもあるので、たまたまこの際、一応取りまとめおきたいという意向が持たれた。

そういう意味で、合同詩集刊行が提唱され、刊行の運びとなった。提出された詩稿は、相当な量であったが、編集委員会で、その中より百七十八篇（作者二五名）を選んで、ここに収めた。作者各位の協力を感謝する次第である。

「移民文学」という「国籍不明」とも、あるいは「未来形の文学」とも言える特殊な性格の文学、そういう「文学」は、今では、ブラジルだけにしかないと思われる。この詩集に作品を連ねた人たちは、若干のほこりをさえ持って、それを文学した筈であるが、今後も勇氣をもって、なおも書き続けるべきであろう。勿論さらに多くの詩に志す人たちが参加すると思うが、この詩集が、それらの人の為に、また、コロニアの文学発展史の上に、一つの道標としての役割りを果たすことを信ずるものである。

目次 (ABC順)

題字……………	赤毛 日出子
出版に際して……………	横田 恭平 3
画板、偶成、その他八篇……………	江尻 潤 7
切株掘り……………	藤田 朝日子 16
朝、女、悪霊、他二篇……………	藤田 勇 17
飯に題す、花と詩、他九篇……………	芳賀 芳朗 20
移民の森、他五篇……………	浜 照夫 30
貧しければ、他一篇……………	浜田 良一 36
丙午、移転、他八篇……………	浜津 まさお 38
小屋の前で、男、他三篇……………	鹿毛 至 43
秋風、現代詩、他一三篇……………	可児 三平 48
荒地の中の雑木のように……………	狩海 亘 60
燃えない木、他六篇……………	真木 衿子 61
受難の花、別れ、他一篇……………	まさき 礼子 66
夜・広野、ロマン派、他一篇……………	水野 林 68
夢、タンボ、他七篇……………	則近 正義 70
地球脱出……………	蓼科 冨智雄 79
四十の日の自画像、他六篇……………	大浦 文雄 80
かに、四十代、他二篇……………	小野 政子 84
晩夏、目醒め、他一八篇……………	志野 明子 86
横になる、他一九篇……………	高原 純 102
切符、朝、他七篇……………	ヤジマ・ケン 128
忘却の塔……………	八巻 耕土 133
ミシリカード、他一篇……………	山川 百合子 134
じだらくになりはてた……………	他一五篇……………横田 恭平 136
夕立雲の詩、他七篇……………	米沢 幹夫 156
何処カラ来マシタ、他一篇……………	葦光寺 舛太 164
作者住所録……………	168
あとがき……………	武本 由夫 169

江
尻
潤

画
板

描いては消し
消しては また
描いてみる
あなたの顔

おぼろげな
面輪は
すぐ できるけど
なぜ もっと
あざやかに
描けぬのか

わたしの画板には
いつまでも
愛するものの貌の
デッサンさえ
仕上らない

けれども
きつと いつの日か
夢にだけ現われる
その素顔を
この筆先で
捉える時が来るだろう

偶 感

私の
体内に
空洞があつて
そこを ひねもす
ひようひようと音を立てつつ
風が 通り抜けるような日がある

私の
胸の中に
内燃機関があつて
烈しい勢いで
ピストンが上下し
油が奔しり
大小の歯車が廻転しつつ
今にも 火を発するかと思われるような日がある

私の
心の底に
湖があつて
蒼く澄み切った
水が湛えられ
どれほど深いか判らない
その底土まで
明るい陽射しが透つていながら
面には
小波も立たないような日がある

移民の歌

夢のブラジル
常夏のブラジル
情熱のブラジル
移民の屑籠のブラジル

祖国を捨てた

放浪の民は

どこにも見つけなかったその幸福を
一掴みにできそうだと
空頼みしながら渡って来たのだが

烈しい太陽と

篠つく雨と雑草とカマラーダに

結局

何も彼も吸い取られ

裸一貫になった時

おお

現実の楽土ーブラジルが
俺の両脚の下に
しっかと、踏みつけられていたのだよ

灯 蛾

まばゆく
明るい
灯を
見つめていると
わたしは
一匹の灯蛾になる

光を慣れて
暗い夜を
飛んできた蛾は
振り落される
光の中に
入ろうとするのだ
いくら撥ねつけられても
尚も飛びつく死の乱舞
遂に 落ちて動かなくなった
それが お前だ

けれども
徒労に嘆くではない
お前が見ているのは骸だけなのだ
それは 確かに落ちて腐ってしまった

しかし
灯蛾のころは
炎のなかに吸いこまれ ー
そこで 同じように燃え上り
かがやく勝利の歌を
うたっているのにちがいない

ある時

A
踏まれても
たたかれても
突き倒されても
痛かあないよ
とは 云わないけど
少しばかり
イエスの真似ができた
俺は うれしい

B
友だ と思って
呼びかけたのに
すげなく
手を振られた悲しみを

ぐつと 胃の腑に飲み込んで何くわぬ顔で
イエスの方を 見た

C

心から心へ
腹から腹へと
どうして こうも
通じないもんかなあ
もどかしさに
ふと
十字架を 考える

D

虚栄
嫉妬
自負
まんちやく
うらぎり行為
みんな
クリスチャンというものの生態と知られたらどんなに主
はびっくりするだろう

握 手

君の掌は
やわらかく
吸般盤を持つかのよう
いつまでも
わたしの掌から
取れにくかったね

君の掌は
ごつごつした
石片に掴まえられるように
がっしりと
わたしの掌を揉み砕くばかりだった

君の掌は
さらさらと
砂が零れるように
非情に
わたしの掌より
離れ去って行ったの

君の掌は
意気込んで
炎が噴き出すようにあつあつとわたしの掌とたたか
かっていたのか

蠟 涙

蠟燭の塚に

灯が消えるとき

わたしの生命が終るなら

何としても

継ぎ足さねばならない

それらの炎は

愛の詩をつづり

憎しみの唄をうたい

怒りの声を撒き散らし

呪咀のけむりを昇らせる

蠟涙は

わたしとあなたの峽間を埋めるように音もなく、流れ、淀むそれは全てが過ぎ去ってしまった残滓であるわけなのだが

肖像

離れているときは
あなたの幻を

逢っているときには
あなたの影を

私は 確かに
はつきり掴んでいるのだが

考えはじめると
あなたの貌は
無惨にも砕け散って

ただ 寒々とした愛情の破片が私の心を鋭く搔きむしつ
ているだけ
ああ

ある瞬間

その時
わたしの瞳は憤怒に燃え 血走っていた

その時

わたしの耳は

反響ばかりで

鳴っていた

その時

わたしの掌は

汗を噴くほど

握りしめられていた

その時

わたしの足は

短軀を安定させようとして揺れていた

その時

わたしの心は

如何なる思考をも

頑なに拒んでいた

切株掘り

藤田朝日子

今日も朝早くから切株掘り
開墾地には数限りなく穴が出来
切株は累々として横たわり
根っ子を天日に曝している
昨夜土砂降りの雨があつて
掘る赤土のなんとやわらかいこと

まず四方に張っている根を
マツシヤードで切除き
エンシヤードで土を掘り下げる
無骨の直根が
やがて貌を出す
マツシヤードを振り直し
俺はそいつに挑む

丁々発矢 また発矢

ともすれば前にのめろうとする事幾度
両脚をふんばり力をこめてふり下した最後の一打ち
手応えあつて直根は切れた
挺子をかけ一押し 二押し
残っていた細根をへし折って
切株はみごとに倒れる
穴の外に転がし出し
汗を拭いて煙草に火をつける

見よ
開墾地に切株は累々と転がり
根つ子を天日に曝している
傍えに大きな穴をのこして。
まるで
幾日も痛みつづけてなやまされた
虫歯を抜きとったような気特だ

朝

藤田

勇

女の
あらはの貝がら骨に
夜の翳が引つ懸っているバス乗場

草枯の道は
白じろと
曲りくねって

丘の
風車に
からまっている
古びた太陽

女

黒のしろうしや
白い陶器
の笑い
の心の襷
に秘める喪章

悪
霊

干からび
疲れ

襷ふかく
萌芽
するもの

何処にも
ない光
の中に

隠花の繁茂

四囲を

閉ざされ
凍る壁

の肌
を濡らし
屈折する

水の炎

空転する
核を
貫き

秃鷹は
刻折り
翳をなげてはすぎた

胎
胚

猜疑の

醸す

平安

捧げもつ

磁の器

ひたひた

とよぎり

たたずむ

影

ささやき

映す

罨

の目の

炎

の回帰

荒 蓼

記憶のやみに消えて行つた
流した汗の構築した 形
欲望の酸性にさらされ
枯色の絨毯 彩る
家畜の声もない

飢えた太陽の食い荒した
不毛を越え のびる触角
夜を縫い
ガラスを透し流れる闇

凋落しらぬ造花 ゆれ
煌めく卓に
虚しさみたし あおる
旅の
思念を引裂く稻妻

飯に題す

芳賀芳朗

今までは、ただ五臓をうるおしただけの飯なので
そのまま素通りしてみな糞にしてしまった

いつか秋風を交えて

独り味わう飯

美味とは別の白い味を覚える

なにか物質の次元の外からのものを感じずる

だがまだまだ真の味は判らない

その一粒にも

不可知者の力と

いのちを削っていのちを得る

汗の光りの雫が凝っているのだと

時にその飯に厳しい叱責を受ける

一生を終わるまで

無味な至味をもつ飯を

一度食べてみたい

花と詩

神仏へ手を合わせる
その隙間を縫うて妄念が割り込む
人為の力めもあらわの世界
花を眺める
いつか無心の境にいざなわれてゆく
そこには天然がおのずからを開く
その美の世界
詩を創る その時間の流れには
自もなく 他もなく 天も地も無い
その刹那の中に人間は消え
しかも人間顕現の後味を覚える
神仏への有為
花と詩への無為
わたしは神仏誕生以前の
花と詩の世界を愛す

水

ただの水であった。
いま髪に霜を置いて
しずかにのむ一杯の水
無味な白い味を覚えて
しんしんとはらわたに泌み渡る
いずこより誰が添える
このはるかなる慈味か

骸骨の独語

たそがれの墓場で骸骨の声がする
俺を見よ

この俺がかく風化するまでは

いかなる言葉も三退する辛酸をなめてきた

今こうして一切を空じ去り閑散な境にいるが

地上での錯雑極まりない生の斗いに比べまさに夢以上の

思いをいだく

未だ脱体という

至源の境は望み得ないが

肉生時代どうして心だけでも身軽にしなかつたかと

これつらつらである

今日も亡者一人

娑婆の愚を演じ、名利と黄金に憑かれて自も他も滅した

男が俺の傍に辿りついた肉が剥奪されていないので致し

方もないが

四次元の世界も知らずに

たわごとをわめき散らしている

ほんとうに土に化し去らない中は

土という故郷に還るといいう味は判らないそれが人間開眼

への入門というべく

そこから、無限次元への

人生の第一歩が始まる

まず、この世的な墓場というものを抜け出さねばならな

い

有無の想念が失せたときに
はじめてみどり児への人間誕生を見る
俺はここに骸骨をさらしているが
起滅粉々これ何もものぞと
結構骨の彼方の歌をうたっている
だからすでに生死の沙汰もなく
生れぬ以前そのものを覚えてる

造花と蝶

美しい造花を手にし
蝶を呼んでみたが
振り向きもしないで
名も知らぬ
野の花の方へ飛んで行った

案山子

肉も皮もない一本脚

身に使い果した祖抱を纏い

縄の帯も無造作に

造化以前の素元さに落書きした顔を

破れ帽子の下にして

稔りの畑に瘦然と立ち

看守っている案山子

風雨を凌いでその重責を果した

彼のある日の姿をふと通りがかりに見る

穫入れの済んだ畑は肅々として

小鳥の影さえない

案山子はと目をやれば

手も足も首も千切れ

帽子は飛散して跡形もなく

胴体だけの残骸を曝している

あたりに秋風だけが彼の死を悼み

哀惜の情を湛えて詩経を称名している

案山子

無位の位を成就する至者である

良 寛

ここに永遠の童児がいる
その老いたるわらべは片雲を思わせ
また流れゆく水にも似ている

その生活は生活の中にいて生活を離れ
淡にして素

起きては摺鉢に顔を洗い
濯いではそれに飯をかしぐ

寝ねては草庵に月を抱き
昼は時にまかせて土を耕す

寺を離れては托鉢をよそに見等と毯をつき
かくれん坊をしては家路に帰るを忘れ

庵に在っては経文を称えること少く
風月へ坐して詩経を愛づる

興おこればさやかに筆を執って書に親み秋風に草枯れ果
てるの書風をなした

日々これ一汁一椀に幸を盛り

ぬす人も詩歌に美化してつねに天然の素中に遊ぶ

良寛……

「モウイイカイナ」 「マダダヨ」

「モウイイカイナ」 「マダダヨ」

今もそこに隠れんぼうの彼の声がする

永遠の童子良寛

不可知者の声

どこから采たいのちか
忽然として私は在った
なぜに

何をしようとして
そして何処へゆくのか
それも判らない
全ては何者かの手に左右されている
虚空に浮かぶ一片の雲
風のまにまに

永遠の前の悉刻の一步
この一步に全生をこめて
人間を習わんとするか
当為にしていや至難の大業
生れぬ前に
元のままに還える
死でもない 生でもない
仮有拝借の償還
不可知者の与えた課題
汝れはいかにして解く
不死者はわらっている

渠に会わんとして

渠は生れたこともない

故に、死んだことも更にない

しかも過、現、末を貫ぬく

普遍にして姿なき劫壺の实在

渠に会わんとして半生を棒に振り

今また秋を送り冬を迎えんとして

未だその片影さえ見ない

一切老なる故恒に共に歩行を覚え乍ら

何故か無限の距離を持つなるを

愚昧にも似て果てもなく彼を追う

未生以前に還った時

渠へ一つに帰入されその一掌下に

無智の覚醒をあたえられるのかも知れない

ただの世界

煩わしい世の中を辞して

この日ごろ気の向くまま土に親しむ

軽い野良着を降りそそぐ陽の光に曝し

白い汗をほどほどに着て

碧い空気を食べ

無色の水を掬い飲む

このあたりでは

草木も人の善し悪しを言わず

ゼニ金の匂いもなく

要るほどのいもも だいこんも 葱も

南瓜も

丸々と土が育ててくれる

おろかもものには迷いの思いもなく

悟りなどの沙汰も更に知らず

全ての人為の憑きものを剥落させて

空潤そのものの世界である

今日も山に遊ぶ白い雲が青い風を遣って

痩せた肩を涼しく撫でてゆく

越格の詩話会

イタペチの山野の風に曝された痩せた顔を大都の詩話会に出す

文化に反比例し会場は・がらんどうとして何の採飾もな

く
その一隅には山なして得体の知れないものが積み累つて
いる

詩座のメーザも古色蒼然と色槌せてはいたがその重厚さと落ちつきは憶かなものであったなにか奥地の農家の匂いさえ漂う

それを囲む人間も漸やくこの国に薄白く秋風の立ち
文学へ近づかんとして世間へ遠い異相を持すそれに正比例して対坐も齒の抜けた斑らな奇観にして奇観的であったが

二輪の色彩がそのかみの名残りをとどめて対照の綾を織つて侍べる

卓上を見れば壺にしでは不思議な器と

巨大なキノコの干し上ったようなものが紫煙の残樺を落す灰皿として異彩を放つ

その外なにもない

いや私の好きな無味がはらわたに泌み徹る真清水が

ここの場に相応しくない透明な器に充たされてあつた

私も簡素主義で億劫な時は飯も忘れる程であるがこの会には敗退しそうである

それは何故か………

かかる殺風景な部屋に四角の卓を円く囲んで半日余を予想外の作品に接し

これに対する談論が風発し虹の文を吐き時の経過を忘れさせるからである

世上もろもろの会あり

それ豪華な虚飾の座に小田原会議を談じ

空念仏を唱えて散会を宣す

これが混迷に陥り複雑化し怪異を招き

黒い沈澱を押し流してとどまる所を知らないかくて路傍の石にさえ嘆息を漏らさせる

これを濾化し蒸溜し淡化し単化してすべてを一へと仰望する詩境

正に本然が指し示す無為にして治まるの世界ではないかそれにしても文化の殿堂の中に自然が残っている詩話室よ

あの水のうまさはそこから浪々と湧き出たものではなかつたか

今も胸の溪間を綜々と流れて心地よいリズムを奏でて蘇ってくる

移民の森

浜 照 夫

孟宗竹のかげで
傾いた墓標が
ならぶ

移民の森にきた
墓石には番号が
つけられ

一せいに海の方を
むいていた

海がみえる
わけではない
死者がたのんだ
わけでもない
ただ地中に行く
澄んだ水が
どこかへ
骨の匂いを
運んでいる

鬼の鐘乳洞

ぽっかりと口をあけた
鬼の臍腑

沈黙の中で

鍾乳石が一滴一滴

歴史をつくる

いったい地球は

五億年の歴史の上に

何億年をつむのか

それまでに

偉大な芸術家は

どのくらい生まれ

滅びてゆくのか

それまでにどのくらい

神や仏や

教祖ができるのか

その時もまだ

この鍾乳洞は

鬼と呼ばれているのか

詩人の目

詩人はときに
錯覚を起こす
赤い花が
黒く見え
鳥の声が
女神に聞こえる
それは心の目が
見るからなのか

そんな者に
かぶれてからずっと
精神病患者に親しみを感じている
現代人の大半が患者
に見えるからだ

まつかさの追憶

その道は
アメリカ松の
針林に消えている

太陽の閉ざされた世界で
少女は踊り 踊る
枯れ落ちた針は
素足に刺さり
踊りは乱れる
乱れながら樹木にからみ
からみながら高まる

毒きのこ
の白い腹がはれつし
少女は気を失う

けむくじやらな男が蜘蛛の砦で
太股をひきつらせると
羽をまとった
種子がとんだ

はるかを
追憶の底で
まつかさだけが
揺れていた

乾季雨

太陽が
赤い大地の
汗を吸い終る時
ダリヤは
干滴びた大芋玉を
さらけだした

何だ何の騒ぎだ
ごましお頭の蟻が
走りまわる
夏雲が空の青さに
酔ったのか
こらえきれずに
透明の娘たちが
落ちてくる
むれた匂い

馬と薔薇

馬が

他人の薔薇を

恋するとき

その澄まし顔に

舌が乾いた

ひと思いに襲えば

空しさだけが残るには

異ならないが………

たてがみを

風にまかせ

ひと声いなくなると

背には中世の騎士が

跨っていた

今はただ

尽きるまで燃え続ける

この塊りだけが

命だった

貧しければ

浜田良一

この穴は
余りに深し

貧乏よ

空を仰ぎつ

太陽をみつつ

術施せど

日は一日

ふかみゆくまま

詮なさに

あえぎ暮しつ

今ははや

余りに荒み

貧乏よ

我が心には神もなし

MELANCORIA

僕は

僕の魂を山の中に置き

心臓を海の底に沈めて

この夏の日をすごそう

そしてその

両方の青さを充分に吸収した頃
僕はその憂鬱の中に沈澱しよう

キツト

そうすれば

僕の血はいよく青さを増して
僕の脳髄は青玉となるだろう

丙 午（ひのえうま）

浜 津 まさお

十二支などは
信ぜねど

それでも気にしていたんだな

孫が生れる

ことになり

暦なんぞを

繰ってたが……

男が生まれた

その日には

ほっと 胸をば

撫でたっけ

移 転

無事に着いたと
便りを書いて
遠く来たナ
と思つたナ

南十字を
ようやく見つけ
泣きたいような
気がしたナ

昨日 今日

寒さと 暑さ
往復（ゆきき）して
とまどっている
昨日 今日

隣の塀から
顔出して
今年もイペは
花つけた

パラナのイペとは
またちがう
都会のイペを
眺めてた

桔
梗

そこにあるから
見たんだが
ずーんと来たんだこの胸に

黒髪の人が
抱えてた
素焼きの鉢は
花桔梗

コンデ街の
午後の陽に
眼の前に行く
花桔梗

焚火祭

天気がつづくし
あったかく
月も円みを
もってるし
バロンも 三つ四つ浮いてるし……………

言うことなどは
ない筈に

焚火祭の
火を前に
物価高など
語り合う

お茶

お茶は お茶でも
日本のお茶を
今夜しみじみ
飲みました

やはり 日本の
味がする
想い出にある
味がする

妻と二人で
遠き日の
日本を語って
しまったよ

日本留学より最近帰伯された尾身香代子嬢
から、日本の近況を聞き土産までいたゞく
その夜直ちにそのお茶を味わって

噂

人の噂と
云う奴は
風にも乗ったり
するんだな

その時 乗った
風次第
どんと 飛躍も
するんだな

夢にも 見ないと
云う奴で
たゞ ぼーぜんと
するだけよ

”ある事件にあいて”

新しい家族（なかま）

今日から内の家族が増えた
インコが二羽と
金魚が三匹
仲よくしようよ
可愛がってやろう

踊りあがって　よろこんだのは
末のリーナよ
その声聞いて
インコ二羽が
悲鳴をあげた

金魚の鉢を　ぐるくる廻り
指を三本
並べて見せる
小ちやな兄ちゃんも
うれしくてならぬ

姪　甥

昨年　パラナの姪嫁ぎ
今年は　聖市の姪嫁ぐ

姪だ　甥だと指折り数え
妻に聞いてもみるんだが
分らないのがまだいるし
近く嫁ぐのも　またいるし

こんな事してだんだんと
他人になってゆくんだな

この静けさ

リーナが逝った
何処まで 行った
夏から 秋と
移って いった

アポロ どうにか
帰って 采たし
彗星まで
現れ 出たが……

皆んな 過去へと
操り入れられて
菊の盛りの
この静けさよ

”リーナ逝きて四月、ようやく

落ちつきたり”

小屋の前で

鹿毛

至

よごれたぼろ服をはためかせ
女は糸をつく

とびちる小米を漁る

鶏や仔豚の中で

やせた幼い女の子が泣いている

男は

かや葺の小屋の壁によりかかって
うつろなまなざしでうづくまり
なわたばこをふかしている
何と無気力な日向ぼこなのだ

それでも夜は

椰子の月が美しい庭となつて
ヴィオーラをかなでて唄う
ここはゴヤス州の奥地です

この日系ガリンペイロは
幸福な男かも知れない

||ゴヤス詩篇||

男

ここは有名なダイヤの産地ですと、彼はひとひざのりだした

ゴヤス州の熱砂にやけたはだは
汗臭くよごれしみ
髪もひげもぼうぼうとのぼして
異常に青白くやせた彼

そのひとみはたちまちにして
放たれた魚のように
生気をとりもどし

いや、むしろ彼が渴望するダイヤのような光を放ち
そこには一かく千金を夢みる
男の執念がもえている

たえずなわタバコをふかしながら
明日に夢をつなぐ

州境の橋

しぶきにぬれて黒光る岩壁の間を
白い泡立つ激流となつて
矢のように流れるパルナイーバ川
ミナス州とゴヤス州をつなぐ橋の上に立って
私は大きな恐怖と感動をもって
吸われるようにみつめている

午後の灼けつく陽光に映える
両州の樹海は
大きな影を水におとして
遠くアララの叫び声がこだまする

行く手に無限につづく
ゴヤス州の処女地
この開拓に未来の夢をかけ
熱情をもやして
私は今 この橋を渡ろうとしているのだ

|| ゴヤス詩篇

かげろう

微風に頬をなでられながら
しつかりと大地を行く

牧や畑の草も青み
森の木々も若葉がいつぱい
耕された赫土のしめったうねり
彼方、村落の光る赤屋根
それらをやわらかにおしついで
ゆらゆらとたちのぼるかげろう

遠くかすむ地平の彼方へ
見果てぬ視線をなげて
まずしい心がうづく

一つの孤独の象を
いのちのかぎり
このかげろうのうずをつくる
空の下で燃やしたいのだ

枯れ野

赫いポエーラがうずまいている道
ただ独り

苦悩にやつれ

汗にまみれたまずしい影を落して

あの落日の地平の彼方へ行ってしまいたい

遠くで牛のなき声がする

うずらの声もさびしく暮れる

モジアナの広野

風にゆれる黄色いコロニオン草の穂先

枯れつくしたゴルゾーラ草

マツチをすったら

ガソリンのようにもえひろがるだろう

どちらを向いても息がつまるようだ

たえずうすいほこりがたつて

疲れはてた私の姿を消そうとしている

秋 風

可 児 三 平

秋風は小さいつむじ風の集まり
公園のアンジッコの大木は
彼等多勢でねじりまげ
垣根のハイビスカスは
手別けした彼等が踊らせる

顔半分笑い、半分暗い通行人
枯れるダリヤに別れを惜しむトルコ
人つむじ風一つの仕業

秋の陽に誘われた散歩の帰り
スーペルメルカードによって
家人のために卵を半ダース買い
何年振りかに葡萄酒一本求める

黄色い小さいつむじ風が
耳から忍び込んだに違いない

現代詩

現代詩は

厄病神の如く

憎まれ

嫌らわれ

そして覗かれる

ときめき

床屋で耳孔を剃らせて 街に出る

秋風が忍びより

ヒンヤリときよきよきかけ

山向うの村 青い空の下に

赤い柿の実 白いすよきの穂

ほのかに女の影もあり、と

秋風よ 誘惑をやめて呉れ給え

柿の実を求めて 口は

すよきの穂を探して 目は

私をすてよさまよい出そうだから

秋風よ

私の心の扉を叩いて告げて呉れ給え

柿の里 すよきの原に

待つ女あり、と
心のときめきを
永い間 私は聞いていないのだから

死 よ

君が来れば誰でも後をついて行く
来いというなら行きますよ
と自棄にいう

そんなに恐ろしい格好をせずともよいではないか鎌など
振りまわしたら君も疲れよう
ノンビリ休暇でもとり
暫らく迎えをやめないか
人は
生きてることを邪魔にされ
生きるのに倦き
喜んで君を訪ねるようになる

石は哀れ

石は哀しいな
春の風 秋の月に
夏の陽 冬の雪に
供に楽しまず

供に悲しまず
隣と唯 並び合う

石は幸せ
隣を付度せず
汚れを意に介せず

裏切らず
裏切られず
故に
石は哀れ

独 楽 (こま)

細い心棒に立って
こまはまわる

紐をからだに巻きつけられ
地面に叩きつけられ
気狂のようにまわる
倒れないようにまわる

まわって まわって目がまわる
休みたくなる
でも休むわけにはいかない
まわらなくなったとき
こまは
火の中に投げ入れられる

荒野

地上五十米のビルの一室に坐って
更に五十米も空深く突きさゝつてるビルに
小鳥の巣箱のようなものを見る
それは、併し、似もやらぬ冷房器
自然を作り替える愚の象徴
そこに 小鳥は住みつかず、よりつかず
荒れ野の空気、漂よう

国境の町

雨上りの夏の真昼

大陸的気候の暑い まばゆい光

バスのポントに集まるのはパラグアイ人スペイン語が大
手を振ってとおる

町から五軒「友情の橋」迄バスで行き

橋を渡ってパラグアイに行き

彼等に混り込んでその生活を身をもって感じ

帰りに無税輸入品を買おうと

麦わら帽を被ぶってバスを待つ私

バスは待てども待てども来ない

待ちくたびれてロタソンを交渉して行くのは担ぎ屋

私はどうしてもバスに乗るんだ

暑い中を五十分待たせて

バスは砂埃を上げて坂を下りて来る

乗り込むと ムーツとした暑さ

野菜・穀類・日用雑貨

木箱・白い木綿袋

疲れてる顔 笑いを忘れてる顔 諦めてる顔

口もきかずボンヤリと外を眺めている

流れる汗を拭いもせず乳房を丸出しに子供にふくませる
女

安物人形を手に持つ少女

バスは橋まで五十センチターボス
グアラニーで払いクルゼーロのつりを受取る者
クルゼーロで払いグアラニーを請求する者
換算が呑み込めずつりを手に思案の
女忍耐強よく説明するコブラドール
橋に着くと
箱を抱え 子供の手を引き
橋を渡るコンビへ走る女
暑い陽の下を袋を担ぎ橋を歩く男

フェリアで来て いつもより多く金を持ち
彼等よりも文化人らしいとの
さゝやかな優越感は
激しい生活の争いからの脱落感
無為の罪悪感 にうちのめされ
まだ止っていた戻りのバスに逃げ込み
ほこりっぽい 雑踏のイグアスの町に帰って来た

左眼よ

左眼よ、近視、乱視、老眼の左眼よ

お前が始めて疲労を申立てたときは腹が立った、今お前を必要としているというのに、とやがて当惑した。怒るわけには行かない、と言って今弱られては、と

そして狼狽に変わった。それぢあどうしたらよいのだろう、若しも眼鏡で補償出来ないとしたら、とお前は一日十六時間醒めている。醒めてるときは働いている。縦書をよみ横文字を見、猥も雑も詩も通し続けた

眠からさめ、不眠に悩むとお前の罪でもあるかのよう
に酷使した

私は何を報いたろうか、食べさすだけでよかったの
だろうか

左眼よ、お前が本当には疲れたのでなくて、サボタージュンをしているのだとしても、文句いうことは出来ない
唯々頭を下げて頼もう右眼を誘わないで呉れ給え、と

ビル街の鳩

木にとまることを忘れた鳩よ

せゝらぎに水を飲み 水浴することを

知らぬ鳩よ

ビルの窓枠にパン屑を待つ鳩よ

よごれて けわしい貌で

N a o F a c a G u e r r a

F a c a A m o r

と機械的に叫び

しなを作っても

交尾ることさえ忘れたのではないか

老いては

せめて今日は時計を持たずにいよう

時間も尋ねまい

逝く年を追いおとすにはあたるまい

拾いそこねた石

イグアスーで拾った、と、美しいめのう原石を貰ってから
五年

自分でそこへ行つて好みに合った石を拾おうと、私は思
いつめていた

サンパウロから一〇〇〇軒離れた河原には

リオグランデから流れつくトツパチオやめのうなどが
大きい滝の美しい水に丸められ磨き上げられ私の行くの
を待っている

五年経つて、今年、漸く辿りつく

雨期の滝は、黄色くふくれ上り、粘りうなり、水煙を上げ
一寸の河原もないではないか

私を待ち草臥れた大きい石は、濁った水の底にのめり込
み

小さい石は落とされた指輪の玉の様にウルグアイ、アル
ゼンチンを通り過ぎ青い水、大西洋へ流れ込んだに違
ない

拾い損ねた石は

水石によい形を持っており

美しい色に輝いており

永く、又、私を悩まし続けるだろう

旅

一泊旅行に出る
連休に混み合うバス
隣りの席に話しかけ ナイフを貸し
新聞を拾ってやるよろこび

見知らぬ町に降りる
誰 彼 をつかまえて
牛の話 棉の相場 景気の噂

ペンソンに泊まる
フェジヨン アロス ビツフェ
街燈のポツンポツンとある夜 埃道
適度によごれた敷布
暗い裸電燈

昨日にも明日へも 繋がりのない
夜

他力安心

私は精確度九九・九九九の電子時計を買った

それを手にしたとき、私は気になっていた

会社の時計をまず直し

ラヂオ、TVのオーラセルタに文句をつけ、駅、広場の時計係に正しい時間を電話した

世の中が正しい時間で進む

○・○○○一の差は一日一秒、一月半分一年六分になる

干潮・満潮が狂い、月世界旅行者は二度と地球に帰れない

私は地球統制を諦め、一日三分違う時計を持ち

朝夕、ラヂオに合わせるようになって漸く気が安まった

徒ら待ち

友は鍵を私に渡して言った

夜、鍵を廻して入り給え

うるわしき蕾あり

私は鍵を廻したが

そこには満開大輪のバラがあつた

私は黙って帰って来た

それは私が求めているものではない

若者のひしめく熱気の中を

頬染めて辿りつくつと

そこに黒いチューリップ

けだるさと冒険の花

それも私の求めているものではない

私は独りでは燃えない小さな火種を持っている

消さない様に少しずつ油を注ぎ

花をもやして見たいのだ

そしてやがてわが身も焼きつくし

人生の終止符をうちたいのだ

と

何の花を探してるかも判らずに

しかも坐って待っている

荒地のなかの雑木のよう

狩海 亘

荒地のなかの

雑木の群の一本のように

ぼくはじつと坐っていた

葉を振り落すように

言葉を捨て

尻に月光を浴びて

馬がつつ走る夜に

あつけなく誰彼と交接し

あとはただじつと坐っていたい

それなのに

ここへは冬が来ない

捨てても 捨てても

言葉はあとからあとから

ざわざわと生まれ

蛍の乱舞でぼくの周囲を蒼白にする

ぼくの樹液をへらし

幹をひびわらせてなお

言葉を繁らせ

他者の方へと

ぼくを傾ける

おまえはなにものか

燃えない木

真木 衿子

台所の片隅で
心の稚ない妻が
幸せを求めようと
いつも何かを視つめている

風呂を焚きながら
生の木が

雨にぬれて燃えにくい
あなたは何がそんなに悲しいの
しゅんしゅんと音を立てて
泣いている
よく燃えるかわいた木を
そえ木してもらいながら
いやいやついて燃えている

かわいた木が
燃えてしまうと
切り口から不足そうに
ぶつぶつと泡を出して
頑固につぶやいている

ぶつぶつと泡を出しながら
しゅんしゅんと涙を流して
泣いている
燃えない木

風の訪れ

遠くからやってくる
息ぶきのような風の訪れを
待っているのに
どこにとどまっているのか
何の変化が起きたのか
風のゆくえはわからない

空ろな季節が次々と来て
花の築いた小さな塔が
実らぬままに花こぼれ
無風の中に消えてゆく

空間に蝶は舞うて
蝶のゆくえも定かでない
昨日と同じ今日
今日と同じ明日
真空管にとじこめられた風景の中で
私の息はあえいでいる

鶏糞と男たち

土にまみれ 鶏糞に汚れ
汗で全身をぬらし
午前十時の太陽にさらされ
何等かえりみない男たち

太陽の下で働くものだけが持ち得る
汗と油に満ちみちたあの臭い！
男たちはどんな夢に己れを托して
生きているのか

あたしの知らない素敵な喜びが
その陽焼けした頬と
白い歯の奥に輝いていた

朝の陽に

私は時々なんにも見えない
時がある
青い空も
白い雲も
みどりの風も

どんな可愛い花が
咲いていても
私の心は
なにも見えない
ただ
背にあたる陽が
じいんつと 私の軀を包んでくれる
なにも見えなくても
そのまま じつとしていたい

夢の塔

永い間積み重ねた

夢の塔

それは美しく耀めきにも似た塔だった

それは優しく切ない夢だった

七彩の虻のような夢だけど

はかなくくずれる塔だけど

あなたのあるために出来上った塔

それゆえあなたに見せてあげたい

けれどその塔はあなたには見えない

見えなくてもいい

こわされたっていい

こんなきれいな夢の塔を

積み重ねてきたことが

あたしには貴重なのだ

あたしがどんな綺麗な塔を建てようと

どんなきれいな夢を見ようと

それはあたしのもものなのだ

ああ あたしの心の内で積み重ねた

夢の塔

ああ いとおしい夢の塔

可哀そうな あたしの塔

私は生きている

ああ いまも私は生きている
大きな呼吸を試してみる
生きていることを確かめている
生きるということは素晴らしい

朝がくる

むき出しの瓦は不揃いだから
でんとんと市松模様に陽が射し込む
うすよごどれた壁ではあるが
風に動く朝陽が
やさしく照り映えてくる

すき間だらけの瓦から
射しこむ朝日を十年も二十年も
私は視つめている
虚しさの中から、そこだけが
明るくささやいている

私はいまも 生きている

ウイ・ウイと啼く鳥

ウイ ウイと啼く
さびしい鳥よ

樹は伐られ
山は崩され
沼はつぶされ

お前の棲家は
なくなった

ウイ ウイと啼く
さびしい鳥よ

受難の花

まさき・れい子

街の中のある盆地の一角に
ジャカラダが 三、四本
濃い紫の花をかかっている
ふと仰いだ私は、美しいと
思うより、胸をつかれた
悲しいその花びらの色、
太陽に背かれ、無視され、

それでも炎える日蔭の花にも似て
けっして、微弱でも臆病でもない
ある強靱さを秘めている
他にくらべて見る花がない
そのせいだろうか、
冷くそして悲しい、決して忘れられない
受難の花

別れ

涙が一ばい残ってるのに
泣かないなんて
おこらないなんて

そうした事態こそ
悲哀と言うのかしら
嫉妬や怒りを
乗り越え
くすぶる煙が
線香のように
しらじらしく
私をとり巻く

カンバス

私はぶつつけたい
私が持っている
すべて、全部を
誰かに
何かに

ケイハクなおとこ
キザなおとこ
ウソつきおとこは不可
手ごたえのない
ノレンのようなおとこは
さらさらごめん

私をやさしく抱きとめ
ホウヨウし
決して離さないものへ
命のかぎりを打ちつけよう
ああウソ偽りのない
しんじつ白い
カンバス

夜・広野

水野 林

故しれず さげすまれ
ふみつけられていたのだが
やがてそれは むつくりと起きた

蒼穹にかわって
もうすべては 星星に占められていた
天空の明るみに
地平線がくろく浮きあがり
風が絡み合いながら野を渡って行く

なんと気持のよいことだ

故しれずさげすまれ
ふみつけられていたそれは 誰知らぬ
広野の夜中 ひとり起っていた
「なんと気持のよいことだ」

次の日もその次の日も
広野にひとりむつくりと起きあがった

ロマン派

こんなことは
そんなに長く続くものではない

やさしく意地悪なくちびるから
咲きこぼれる声と
さんざめく友と 酒杯と
翳らぬ僕と

こんなことはもうすぐ
終わるにちがいない
はやく静かな悲しみが
僕をつつまぬものか
僕の故郷はそこのだ

瘤鯛

俺は黒くてでっかい瘤鯛のような奴で
海の底を茫然と幽霊のように
泳いでいるんだな　とも思わない事は　ない

海草の揺らめく繁みに向って
海の水が押しているのだから
それとも本当に俺が動いているのだからとむかく静かに繁
みの中に入っていきそして暗鬱な速度でまた出てくる

かと思えば
不意に身をひるがえし　上の方に行き
広くもない岩穴に好んで入っていき
それから
迷いもせず　からだを動かしていると
何となく別の穴から出て行く

いったい何をしているんだ
どこで何を喰っているんだ
いつうんこをしているんだ
俺自身にも良くは判っていない
海の底はうす暗いので
たれも俺を知ってはいないだろう

夢

則 近 正 義

真新しい黒の背広を着用に及び
取って置きポーズで
胸に組合わせている皺だらけの薄汚い
手！

まざれもない おお 僕の両手だ
だが わざとらしく ぎこちないポーズ
黒の背広を一体 何時新調したのだろう

あれほど 苦しみに苦しんだ僕の咳は
嵐のあとのように不気味にぴたりと止んで
不思議なくらい 胸が楽になった

僕の周囲には おや 人影が全くない
みんな何処へ行ってしまったのだろう
誰か呼びたいと思うが
声が出て来ない

さつきから一匹の蠅が
折紙細工のように痩せ尖った
僕の鼻のてっぺんの 同じ場所を
性急に 我が物顔で彷徨している
けれど 別にくすぐったくはない

僕の周囲を

神々しく 明るい花の薫が包んでいる

僕はこっぴり埋もれている

百合 マーガレット 夜香花

日頃 僕の好きな純白の花ばかりの中だ！

僕は 両眼を針のようにうつすら開け口をぽかんと開けて 安らかに眠っている

何も白痴の真似をしている訳ではない

絶えず 左右に頭を傾げる

蠟燭の炎の匂いが

部屋の重たい空気に溶け込み

複雑な曲線を描く 無数の線香の畑が交錯してひっそりと部屋中を這い廻る

何と！ 僕は 今

漆黒の棺の中に 納まっているのだ？

タンボ

「田圃」でもいけない
「たんば」も駄目だ
そうだ そうだ
おお 矢っ張し 「タンボ」だ

村中一枚のタンボ
きちんと 水面に並んだ稲の列
爽やかな緑色の 稲の影 影 影
アゼミチに 疎らに生えた ナタネ足元の
セセラギの音
霞の奥の ヒバリ

タンボだ
ああ 矢っ張し タンボだ
タンボが一番ぴったりする
タンボが 懐しい

ひっそり 光る タンボの泥臭い水
千鳥足で 水スマシが稲の間を歩
き廻る

真昼のタンボ
ゲンゴロウは螺旋を描くことに熱
中する

トンボは根気よく尻の先を濡らす

日本！

真つ先に 頭に浮かぶのは タンボ
タンボが 恋しい

かすかな 稲の葉ずれが

タンボから タンボへ渡り

甘い稲の花粉の匂う 夕暮の微風が

遠方から

物哀しい 草笛の音を運んで来る

少年の日の タンボ

すっかり 色あせて

頼りなく はかない タンボの記憶

あの 泥臭い タンボ功水を掬ってみたい

あの 細い タンボのアゼミチを歩いてみたい

日本の タンボ！

棘を棄てろ

によきによき　ぐにやぐにや
ぐしやぐしや　つるつるてん
みんな　サボテンだ

なんとまた　風変り
どいつも　こいつも
見れば見るほど　素朴で
その癖　ちゃんと個性があつて
まる出しで
飾り気なんか　これっぽちもない

だが　サボテンよ
何故　棘なんか持っていやがるんだ
棘なんか　棄ててしまえ

学校の窓

その学校は
教室の窓が みんな低かった
教室の窓は通りに面していた
その窓の外を 僕は歩いていた
弾力に富んだ 女教師の声が
窓から通りに 流れ出ていた
授業は国語らしかった
良く響く 透き徹る声は
動詞の不規則変化を説明していた
学校の長い壁に 朝日が反射していた
朝日は 教室の中まで侵入していた
教室の隅っこに 女生徒が立たされて いた
全身に朝日を浴びて立っている女生徒は日系だった
漆黒の髪がおかっぱで
ぺしゃんこの鼻をしていた
不図 眼が合った女生徒は 頭を下げ 眼を伏せ
すぐにも泣き出しそうな表情になった
僕は慌てて 眼を逸らした見てはならないものを見た
と思った
いけない事をしてしまった と思った
心が 俄かに 重くなつた息苦しくなってきた
僕は 小走りに
その学校の窓から離れた

水 虫

そ そんなに

針で指の間を突き刺さないで呉れ
良い加減に止めて呉れ
もつと大人しくできないのか

水虫よ

何時からか

指の股に浅い泉ができ

そこから冷たい清水が流れ出す

だいぶ長い間

一滴の雨も降らないのに

これや又一体どうしたというのか

水虫よ

水虫よ

熱つつつつつ

本当にどうしたんだよこれや又

畜生っ まきか指の間の泉に

ガソリンをぶっ掛けて

放火でもしたんじやあるまい

熱つつつつつ

髭剃り

鏡の中に現れた 羞んだ顔よ
おや 額と鼻の先の皮が剥れている
何時 日焼けしたのかな

顔中を

伸ばし・縮め 又突っ張り
豚の鼻 猫の目 アカンベなどする
真面目腐って 自分の顔と
根気よく 呪めっこだ
双方 笑わない

髯を剃り終る

蒼白く きらめく朝の光と：
ひんやりする微風が
顔の皮膚に 隈なく染み込んだ

風呂場で

小窓のガラスの外が
刻々 黒ずんで行く

風呂場の狭い暗がりに
薄い 乳色の湯気が立ち籠め
睫毛と鼻孔をたっぷり湿らす

淡々 立ちのぼる 熱い湯気の中にと
湯気が軀中の疲れを持ち去るようだ

一枚の古い鏡のごとく

鈍く ぼんやり光る 長方形の湯に

深々と 充分に額まで浸して

屋根にこぼれる雨の音をじいと聞いている

海へ行こう

オ父ちゃん

何時か 海へ行こうね

ヨウは オ兄ちゃんやオ姉ちゃんと

もう喧嘩しないよ

夜は一人で泣かないで寝んねするよ

オネシヨだつてしないよ

ヨウは 勉強もいっぱいするよ

ね だから

オ父ちゃん

何時か 海へ行こうね

うん 行こう

海って それはそれは広いんだ

こんなに高い波がね

一日中遠い沖から押し寄せて来るんだ

オ父チャン達はね

三十数年前

まだ十二才の子供の時

その広い広い海を

日本から 大きな船で

四十日もかかって渡って来たんだ

そうだな

何時 海へ行こうか

末娘は

満七才で 小学校の二年生

まだ 海を知らない

暦を替える

厨の隅の壁の釘の
薄くなった

一九七〇年十二月の磨

四隅は捲れ

薄黒く煤け

おまけに 覚え書きだらけで

右上端は 三センチほど破れている

鉛筆で

27日が丸く囲ってあるのは

妻がガスを取替えた日だ

一九七〇年十二月三十一日

真夜中寸前

町中の除夜の汽笛が一せいに鳴り出すのはもう 間もな
くだ

今 厨の釘から

おもむろに

軽い 古ぼけた暦を取り外す

そして その同じ釘に

ぷんぷんと まだインクのおう
一九七一年の
真白い 暦を掛ける

地球脱出

蓼 科 冴智雄

誰も知らないうちに
旅に出たい
満月の夜、そつと
ただ一人で旅立ちたい

太陽系を越え
銀河系を横切り
誰も知らない
遠い彼方へ
行ってみたい

誰も気付かぬうちに
旅に出たい
この地球に、自己の
記録の一片をも
残すことなく
永遠の旅に出たい

四十の日の自画像（1） 大浦文雄

音もなく
時間の鑿に
刻まれてゆく
一つの
彫像。

色あせた感情の 欠片散らばり
端正な理智の たたずまいもない

僅かに にじむ
意志の 白い輝き。

人知れぬ真昼の静寂
窪んだ眼窩を
時として
よぎる
雲影。

四十の日の自画像（2）

風雨に晒され
陽に灼かれ
埃をあびながら

ゆつくりと
熟れてゆくもの。

理智で武装し
笑いで擬装し
時代の波に洗われながら
ゆつくりと 固まってゆくもの。
ひとところ
青い
かなしみの
痣をのこして I

(3)

緑を
刷毛に含んで
今日も
立ちつくす。

空白の
カンバスに浮かぶ
自画像の
前。

四十の日のうた (1)

雨の日に

傘をさして

人が歩いている姿は佗しいものだ。

だが

若い二人が

一つの傘の中でよりそって行く姿
は美しいものだ。

子供などが

三四人一つの傘の下にかたまつて
歩いている姿などは
まったくほのぼのと温かいものだ。

(2)

深夜

ふと目覚めると

おのおの自分の胸を抱いて眠っていた。

かたえの妻よ

わびしいではないか。

僕の夢みていたのはお前には解らない

お前の夢みているのは僕には通じない。

子供等の巣立って行ったあとの家に
屋根瓦を数える様に ひっそりと
各々の胸を抱いて生きてゆくのは
妻よ

かたえの妻よ
わびしいではないか。

四十の日のうた (3)

電話をかける
耳の奥 とおくで
ベルがなっている
ベルがなっている

たずねるひとの
こころからは
なにも響いてこない
むなし電話を
今日もかけている。

電話をかける
耳の奥 とおくで
ベルがなっている
ベルがなっている

(4)

あなたの
お召は
古代紫。

その色に染みて
僕のこころも
古代紫。

静かに向き合って座っている。

この
虚しいまでの
時間の
充実。

か に

小野政子

真直に歩きなさいって………
だって

私は真直に歩いているつもり

横向きに歩いている

ように見えても仕方がない

それが世間の目 というもの

私は真直に歩いている

胸一杯の呼吸で

ひたすら

泡を吹きながら………

四十代

鏡の中に

昨日と同じ顔を

求め

見出だし

安堵する

女

火

円い炎を上げている
程よく調節された
ガスフオゴンの火

もし

抑制のバネが外れたら
この家を吹きとばし
生活の凡てを破壊するだろう

恐ろしい力を内蔵し
しずかに燃えている
プロパンガス
わが胸の火………

しあわせの園

しょうしやな柵
みはるかす、広い庭
池をめぐり
色とりどりの、草花のみだれ

中を逍遥する男女たち

「こゝは幸福な人の入る処です」
とつげる受付の少女

終夜、転々として

ねむれぬ暁け方の

鮮やかな幻覚

晩 夏 (一)

志野明子

何ということもないけれど

空に向って衿を掻き合わせる

沈潜んで見えた昨日の人の眸

それにもかゝわらず

厚かましい声の出ていた

唇をふいと思ひ浮かべ

夏の惑溺にうす茶のべールをかける

晩 夏 (二)

切り倒したカッピンが
一日の陽で白く乾く
群がるような速度で
万遍なく曇ってしまう空
手足の細い腹の突き出た幼児を追い立てながら
痩せたムラタが行く
この頃の天候は不安定で
さっぱり分らない
唇に油を塗る

晩 夏 (三)

単衣の肌がとき折りすつと冷える
風は昨日のままの速度で
耳の辺りを過ぎるのだが
夏は竜う幾らも残ってはいない
笹笛を街えて座す芝生は
素枯れた匂いが ふうつと漂う
遠く離れた故郷から
うすい便りが届く

晩 夏 (四)

何時も裸の黒人の童が
よれよれのカミーズを着せられた
実らぬ芭蕉の一群が
いやにそうけだち
シヤガレイラの花の
うす呆けてきた合間に
つんと高くなつた空で
記憶の碎石のように
ときどき光りがきらめく

目醒め

熱のとれた快い目醒めに
誰かゞ呼んだような気がした
寝台の下を覗いてみた
うすい夕方の翳りがあつた
起き上がって扉に手を掛けてみた
カッチリと鍵がかかつていた
衣裳戸棚を開けてみた
樟脳の匂いがした
これは人の臭いではない

くさいろ

くさはらに

くさいろの着物を着た女が

さつきから佇んでいる

ながいこと佇んでいる

女が動かないから

陽の光りの中に

女が居ることが分らなくなる

透蚕と女

外界を遮断して

全き孤りに還らんとする透蚕の

糸吹く直前のあのもの憂い軀のこなし

女の性の哀しさは

確めたと思う背後から

恍惚とうする虹に似て

あるいは、黒いジエレイアの

びろびろとした暗鬱に

のめり込むしか知らぬ退廃の魂

潔よき離脱を希い

透蚕はようやく無色の冴えた糸を

東に向かって、

力の限り吹きつける

西に向かって、南に北に向かって

あるいは、安易な敗北かも知れぬのに

次の生命を希って変身し

自らの殻を巡らす

透蚕よ、女よ

秋 風

秋風は何処から来たの？

秋風はね、コルチツサから来たの
コルチツサでは

オチンコを出した裸足の

小さい黒い子が泣いていたんだって

赤ん坊に吞ませるお乳がなくて

母親はミルクを貰って歩くうち

男の子のこと忘れてしまったんだって

秋風はそれから何処へ行ったの？

秋風は広い畑に行ったんだって

ずっしり頭を垂れた熟れた稲穂を

サラサラ撫でて行ったんだって

真白に脹んぞ棉畑の上を

すうすう駆けたんだって

棉畑ではジョンとマリアが

せつせと棉を摘んでてね

秋風がその辺で少し休んだら

二人の話が聞こえたんだって

”ねえ、この秋風がある中に

早くノルテへ帰りたいわ”

”あゝ、サンパウロの冬は寒いからな
棉摘みが済んだら直ぐにも

あつたかいノルテへ帰ろうや

秋風は何処で生まれたの？

也尊い遠い海に生れたんだよ

海はね、サール・アマルゴのように

塩辛くって

空よりももつとアズロンで

空とおんなじくらい広いんだよ

冷えぎわのジエレイアのように

うねうねと朝も昼も

夜も動いているんだよ

陽が照ると

お船も海も光るんだよ

その光りの中から

秋風は生れて来るんだよ

重　　心

悲しみが踵まで下がらないから

揺れて揺れて重心を失う

外側だけしつとりと濡れて

心の中の空気が乾いているような

奇妙な果敢なさの中で

拡散してしまった虹

目の前で倒れた童女が
泣き叫ぶ声につながる
百年も昔の記憶のなつかしさ
やっと己れを取り戻し
悲しみの重心が踵に下がり
童女の泣声に埋まって
わたしの upper body がわくわくとなる

成 長

からだじゆうに接吻の雨を降らし
悶絶するほど激しく
母親は幼い子を愛撫した

膝の上に軽く揺り乍ら
空飛ぶ絨毯や魔法のランプで
父親は幼いものゝ夢を育てた

復讐の如く母親は子を愛し
贖罪の如く父親は子を愛する
密かな棘を内に貯えて
奇妙に、
伸び伸びと子供は育って行った

雨

古瓦の破れ目にも

石畳の窪みにも

まるで妄執のように注ぐ

細かい昼の雨

隙間という隙間に

吸いつくように降りしきり

熱気で脹らみきった地上を濡らし

佇つでもなく座るでもない不安定さに

狂女の潤み淀んだ潰れそうな眸

重く垂れ下がる髪、乳房

心ゆくまで濡れながら

女は待っている

かゝるとき南から男は帰って来る

西からでも東からでもいけない

まして北からであってはならない

かゝるとき、男は南から

狂女に索かれて帰って来る

犬

犬が吠えている
吠えながら泣いている

昨日も、その前日も
同じ声同じ調子で。

あの犬には

さまざまな苦悶と悲しみと

はたまた幾つかの

希求があるに違いない

犬は言葉を持たない

もろもろの思いをこめて

一つの声でしか表現出来ないだが、ふと考える

一本調子で突く犬の哀訴は

あるいはたゞ一つの想いなのではないかと

小川

小さな流れです

清らかな流れです

快い音を立てゝいる小川です

夜中、世界中が眠り鎮まるとき

この小川は逆さに流れるのです

噴火口

尖んがって痛い
この二つの隆起
劫初より燃えつゞけて
ついに突き上げた
これは女の噴火口

ねむり

陽に向けても
暗に向けても
万華鏡は妖しく目眩めく
すべてを封じようと
閉じた眼うらに
アラベスクの限りもない変幻
もうろうとした眠りの霧が
襲うとき
ゆるゆると現れるわたしの童女

胴
体

一九七一年三月六日午前二時

ふと目醒めた今

耐えられないほど真実の

わたしそのものに還りたいと思う

生まれたばかりの大して

脳髓の働かない最初のわたしに。

手も足も余計なものだ

手は私自身を偽ってときに

好もしかからざるものを掴み

あるいは、心にもない優しい

仕草だってしてしまふ

脚だって同じことだ

気が向かぬのに人に従って歩いたり

踏みたくもない場処に出掛けても行く

目だってそうだ

耳も、そして口も

不遜に人の心の襞を覗いてしまったり

魂を痛ます雑言を聴いたりする

憎悪や、それよりもっと悪質の

迎合の言葉だって吐きかねない唇

実際すべて不快なそれらを繰り返し

明け暮れしている器官

首を切り捨て

手脚もぶつとりもぎとり
胴体だけごろりと残したら

どんなに清々するだろう

そうだ脳髓だけは……

純粋な脳髓だけは

心臓の傍らにぶち込んで置こう

阿訶・へつらい・迎合

まして殉ずるなど真平だ

協力・奉仕・善行

こころにもないそれら一切とは絶縁だ

非難にも誘惑にも

ケロリとして微動だにしない胴体

すべてを失った、つまり

すべてを捨てた胴体からは

久しく文明に毒され侵蝕された以前の

原始の人間の芽が出るだろう

想像もつかない芽が出るだろう

確立した純粋な自己を持つ人間の

嘘のない芽が出るだろう

一九七一年三月六日未明

真実のまったくの己れの胴体になり

たくて

頭の芯と眼をふつつ

暁闇の室に炎す

べ
ー
ル

眼の縁を真黒にして
胃痙攣に苦しむ洗濯女

カウンターの奥から

流し目を忘れぬ脂肪太りの酒場のマダ
ム

余りにも長過ぎた過去を持つ奴隷・女
限られた枠の世界で

青い情念を燻らせている老尼僧

カナリアのような跳り返りな金髪の小
娘まで

あゝ、

女という女の誰も彼もが

うすい闇のようなべールを

背後に垂らしている

御破算です、御破算です

叫んで駆け出しても

うすい闇のようなべールは振り落とせ
ない

ベン・テ・ビー

ベン・テ・ビーが啼く

谷底の道を隔てた

向う側の斜面の草原

一本のスイナンの古木がある

ベン・テ・ビーが啼く

明るい七月の冷える空気

スイナンは焰の彩に燃える

ベン・テ・ビーが啼く

澄み透る声で

愛恋の哀しい思いで

真黒なベン・テ・ビーは

緋のようなスイナンにはよらない

歪んだ自然のマモーナの

枝を揺りながら

澄んだ明るい光りの中で

ベン・テ・ビーがないている

昼の灯

古いアパートの窓の一つに
灯がある

昼間のアパートというものは
眼窩のようにどれも真暗いのに

あの窓一つだけ
消え残りの鬼火のような
うす赤い灯が揺れている

あそこでは今
白濁の眼のぬらりと光る黒人老婆が
嬰兒殺しをやって退けたか

それとも、あるいは
シッポーのように痩せ細った
年令不詳のマクンベローが

脂汗を滴たらせて
逃げた女を呪詛して
七種類の乾草を

燻しているかに違いない

暗い室

窓から見る地平線の上空は暗い
頭上をずんずんと
暗い空に向かってゆく雲は
挑戦なのか
それとも
同調するためか。
腹を撫で乍ら見ている
其処だけ暗夜となった空へ
ときどき現われる飛行機が
吞まれてゆく
その空を背景に
凧が一つ上っついていて
激しく動いたり
貼られたように
静止したりする。
凧は空に在るとき
魂を持つ
確かに持つ
でも、
わたしは腹を撫で乍ら考える
太ったのだろうか
腫れているのではなからうか、と。
さっぱり分らない
何もかも分らないことばかりだ

横になる

高原

純

俺が家にもどると、家には俺の居場所はある。くしゃくしゃになったレインコートや心臓を壁に吊り、揉みくしゃにされた体をカーマに伸ばす。がいから伸ばしても一メートル五十七糎半カーマは、昔から昔ながらのコルシヨンニア・キリーナ、ふわふわでない、エスプーマでない、モーラでない、この寝心地とも、もはや何十年来のなじみだ。この上で俺は、大凡人間のすることばして来たが、それは誰が許してくれるのかは知らない。背のびをしあくびはする。が、しかしいくら伸ばしてみても一メートル五十七糎半、つまだったところで出来たことはない。せめて、もの思いに洗われたシイツは白いが、何とそこには、実にそ知らぬ顔つきをして運命のやつが待っているのだ。俺はその上に横になる。

ずぶ濡れの論理

一本の傘である。

この小さな被装物は

大して役にたたないと言うのは

あの

吹き降りの中を歩かねばならなかった

君や僕らの論理であるが

そんなら

小雨の降る日にさせばよい。

並木の梢がわずかに芽ぐみ

街の遠くがぼんやりする

そんな

小雨の日にさせばよい。

レインコートを着てさせばなおよい。

桃色のコートのかなかで

成熟するおんなのからだ

そぼ降る小雨

ああ

なにか知らないが雨が降る

じめじめ、今日も雨が降る

傘を持たないばかりの

この不如意が濡れてゆく。

透明な昼ね

空気と光線と友情さえあれば ゲーテ

それは、別に

あこがれるほどのものではないが

一つの

蠱惑的、であるのはまちがいない。

そこでは

乞食のようにうろつく事ができるのだ（むろん

寒くもなければ暑くもない。

腹が減ることもない。

この、ぎりぎりの底辺で

俺は

自だらくな昼ねをする

そこには

空気だけがあって

光線のように透明だから

かげも形もなく

過ぎてゆく時間ばかりが

ときおり

雲の様にかげる。

ぬけ殻のために

あれは、一体

神様なのか、

それとも

群をはなれた野良犬であろうか。

ゆうべは、どこをうろついた。

それにしても

人間が人類であるように

あれは、犬族にすぎないのだ。

たとえ

神様のようであつたとしても

野良犬よ

犬族である神よ

おまえはどこへ行こうとする。

ぬけ殻を一つ

残して。

ゴム・ゾーリの神様

眠らない夜の厨に

灯をともすと

うろちよろしているゴキブリや郎

この、前世紀の遺物とは

気があわぬ

いきなり

ゴム・ゾーリを脱いでたたく。

叩かれて死ぬやつと

叩かれそこねて逃げるやつ

どこか

食器棚の下にでも這いこんで

運命とはこんなものだ

とぼやいているに

ちがいない。

私の木

木の枝を伐って土に挿し
芽を吹くように
私のからだも
芽を吹く
腕を切っては土に挿し
目玉をえぐって地に落とす

ああ
なみだと汗の樹脂よ

そして、わたしは
私の樹が
繁って行くのを見ながら
おのれの無残を見ながら
永遠に
向かって
ゆこう。

灯風船

六月の空はもつとも蒼く
六月の夜はもつとも黒く
六月の夜はもつとも長し

色青き赤き紙を
貼り合わせ、球体となし
その中心に火を点ず

バロンよ

あわれ、バロンよ
火と紙の共存物よ
なれはその共存の原理により
夜空の深みに浮上するなり
もとより

はかなき浮遊物なれば
風吹けばゆらぎ
なかなる焰もゆらぐ
かかる危うき均衡により
わずかに上昇の思いを遂ぐ
時に

燃えざらんとして燃え
もやさざらんと欲して燃やしぬ
それもまた命運なれば
たちまち、団々の炎となりて
悔恨の油煙はにおうなり

紙を切りて、貼り合わせつつ
ひたすらなるは
少年の吾が子らなりき
火口よりその火をいれる
一瞬の心はずみに
少年の彼の日もすぎて
六月は去り
六月は来る

吾が子らよ
その心のなかに
いまも尚バロンはありや
過ぎし日の思いはありや
浮上するものの哲理
かの危うき共存
均衡を思え

六月はブラジルの冬
夜もつともながし
燃え易き紙と
燃ゆるほのお
かのたくみなる制御もて
大空にはなつ
大陸の夜のあそび
バロンよ
ゆるやかにのぼれ。

イタペチ行

抒情のような丘を越えると
恥部のようにやさしい疎林がある
わずかに彩どりを添える四月の花
山あり

石ありで、遠く迂回するもの
水は山系のひくみをつたって
ゆるやかに

あるいは満ち
大凡の移行を遂げる
流動の様相をもって流れるもの
時ありて

生命のようにもひかる。

その上にかかる橋をわたって
わたくしたちはやって来た

この水の
行きつくところ

あるいは
どの様な論理の悲惨がまつか
はかり知れないものではあるが
すくなくとも

水の精神は垂直に下だる。

今日

晴れた空に

秋の気流は動き

自然は

なお青く

蛇のたぐいを這わしめ

また

その毒をたくわえさせる。

降雨は

ときに天災になったりして

大自然の暴威を享受するが

人災は、時々刻々

この空を

犯すことはないか。

点在する家々の屋根と白い壁

いかにもさわやかな風光ではあるが、

見かけほど楽ではないと

誰かが

つぶやいた

ような

気がする。

白

鼻の穴をさぐって

鼻糞をほじり

鼻毛を抜くことは

日頃のたしなみでもあるが

その鼻毛にも

白いのがまじりはじめた。

鼻毛の白は

恥毛のような白で

体中

毛と言う毛は白くなつて

俺は次第に

白くなるのか。

鼻糞のたまる鼻よ

鼻毛の伸びる鼻よ

風邪を引く鼻よ

その鼻の上の眼よ

眼の奥の脳髓よ

脳髓の襞よ

その襞にはもう

未来なんぞない。

死んだ親父とおふくろ

兄思いでない弟たちに

親の心がわからないのも

ブラジレイロの子供たち

その上に二重写しに
鼻毛まで白くなる俺たち夫婦
の、日本生れ

失なってしまった過去と
なくなつた未来

その、ぎりぎりの境目で

俺は

鼻糞をほじり

鼻毛を抜く

無聊のつれづれに

夜の思いに

何もかも

鼻毛にまじる

白だ。

菊の花の季節に

スザノは

花どころ

そして秋

白、赤、黄、大きさまざまな

菊の花の咲き匂う季節に

あんたは死んだ。

花が好きだったあんたのために
村人はたくさんの花を持ちより
花輪を造り
お棺の中を
花で埋めた。

にいさん、わかるか、うれしいか、

人間と言う

不思議な因縁で

愛媛県人のあんと

山口県人のわたしが

徳島県人の娘をもらい分けて

義理の兄弟となった。

別に気が合うと言う訳ではない

人間同志

傷つけあわないために努力し

移民と言う運命を分ちあった

いま

あんたは

路傍の雑草のような

六十余年の生涯を終わり

私はまだ

生きてだけはいる。

いま

わたしは

削られた白木の前に
瞑目合掌はするが
敢えて因縁の死を嘆く思いはない。

ともに移民の宿命を辿り
その宿命のなかに
つつましく
まじしく逝った
同行、のひとり进行
遠く
想念の彼方へ送る。

タマシイヨ、ナオ、ヤスラカナレ
生涯は六十年と六年に移民のひとりこの夕べ死す
まどろみの一夜明くればなきがら
を黒き柩の中に移しぬ
カメリアも匂える菊も咲く故にこの豊穣の中に眠るか

形骸讃歌

便りに替えるもの

ドンペードロ二世駅構内をぬけて

記憶にまたがる二条の街路を越える

まさしく古ぼけたリオの一隅

ささやかな過去の堆積の中に

あなたが引きうけたと言う八百やがあるからだの若いお
けいさん

歯ぬけ爺の片岡氏

そのあとを引きついだのは

気ばかりが若い旧移民

土に吸われ焼かれた

ミイラならぬミイラ

くたばりそこねた形骸です。

さてさて

野菜の鮮度

生きはよいのか悪いのか

がたがたのバンカにならべ

あなたは何を売ろうとする

それは

青い野菜か

昨日の夢か

それとも

秤にかけてた人生か

ドンペードロ二世駅構内をぬけて
まさしくのぞむリオの一隅
記憶の中に蒼然としてバンカ一群
いつの日に行き
目のあたり見ん
六十年の過去をならべて
売ると言うバンカのおやじ
しなびたなすびは心臓に似ていても
まちがえていのちは売るな。

このバンカ群は接收とりはらわれて

その後を知らず。

剩窃的人生について

糞蠅が
鼻の穴から
出たり、はいたり
あれは、
付け鼻なのだ。

その疑似物質の下で
おまえは
小鼻を
ひくひくする

そのうち
見ていると
おまえの頭が
穴の中から出て来た。
糞まみれになって。

ソンミの空

北越南上の空を
一メートル立方ばかり載りとつて来た。
それを更に細分して
方一糶角となし
夜の机辺に置く

この気体は
同量にして六百トン
聖市上空の汚層よりももつと重く
一切の光年を絶った時空のように黒い。

深夜　この“かたまり”を手にとると
さまざまな音がきこえ
一せいに起こる機銃掃射
靈魂を救うイエスキリストの声と
遠く、かすかに消える
幼児の泣きごえをきいた。

五月の日に

○

ぜいたくな学校の

生徒たちは

黄いろい喪服を着て行進し

鼓笛の音は秋空にひびく

小さなバンドガールは

こまっちやくれた女の原型に

その尻をふり足をあげ

音楽にあわせてちんばを引く

無意味な爆竹は空にはじけ

雲はときおり影を落とすが

なべて平和に

与えられた祭日を祝福し

この一日を送る。

○

つまらないことを

思うよりも

猫よ、ひる寝をしよう。

今日

その、メーデーのため

遠空ははるかに澄んで

五月は

ブラジルの
秋だ。

○

策の目のような
空から
降って来るひかりは
こかげのように
たのしい
なべて
もの憂い過去と
未来の間を
ただようもの
この刹那
この日のひかり。

海峡の夜

ある時季、私は、生き疲れた様な
体と心を、とある、海峡をのぞむ
宿の一室に横たえていた、そんな
ある夜

海峡に夜の寂寥はながれ
その上をゆるく移行する機帆船
機関の音はたんたんとして
次第に遠く
舷灯とともに晦冥の彼方へきえる
船は、いま、潮流に進路を求め
夜の大海に向かうのだ。

遠めがね

これは
稀代の遠めがね

人間のはきだめ

闇夜の塵芥焼却場

あの

汚臭の中から

やっとの思いで見つけて来た。

これを

目の上にあてると

地球の裏側は無論のこと

諸君の心もよく見える

レンズは真空

永遠の筒に収める

あまりにも

無色

透明

で

見せたいが
見えぬ。

丘の上

丘の上の

眺望はよかったが

井戸水は

たえず、涸れがちであった

継ぎたし継ぎ足した家の中で

子供たちは結婚し

部屋には

がらくたが増えた。

「Sさん、その後はどうですか」

「まあ、まあ、何とかやっている

物置きでなくなったガラージに

ようやくはいった、小型カー

だが

それは

過去へぽっかり

向かって

走る。

会話について

彼は、まるで

土蜘蛛のように

地べたに

這いつくばっていた

そして、私を見ると

ああ、あんた、か、と言った。

これがあいさつらしい。

彼は跣足だ

土に密着した素足の裏は

年輪のように厚い

大地の精気を吸いあげるため

素足で歩くのだ

と、彼は言った

竹やぶにかこまれた湧水の池は

出口のない沼のように蒼い

睡蓮の花が咲いている

綺麗だろうと言うので

綺麗だ、と答える

空港の時間

空港の夜のロビーに

ひしめいている

ひしめいている

ひしめいている日系人

中年、老年、男女の群

日本がえり

万博見物の群だ

見送るものと送られるものの情念が

ロビーをこめてむんむんする

遠くて近い日本

近くて遠い日本

日本がそこにある

そのひとは

日本を掴むような手つきで

旅行社のネームいりバッグをだいた

待ち遠い時間のながれ

漏刻の虚しいひかり

万斛の思いをのんで

ふくれあがる旅客機の胴体

ジェット

ジェット機の始動音が

悲鳴のように夜空をつん裂き

ああ暗黒のどんでんがえし

しやにむに空へ飛びあがる。

四月

四月は日本の春

人情の花弁はうすい

桜の花が咲いている

まっている。

切符

ヤジマ・ケン

俺が運転することを嫌ったお前

だが免許状をとると

とたんに自動車を欲したお前

直腸癌の手術をして

外出の不自由なお前は

俺の自動車でドライブする日を待って
いた。

お前が逝って一年

独りハンドルを執りながら

第一に覚えたのがお前の墓への道……

俺は生きる指針を失くした。

と思った瞬間、自動車は電柱にぶつか
った。

だが、幸か不幸か お前の所に行く

切符は出なかった。

朝

朝起きて布団を上げる
布団カバーを敷く
落ちた襦袢のボタンをつけ
髭を剃る

お前が小遣いで買ってくれた
剃刀の刃は残り無く
刷毛もチビてしまった。

娘はまだ起きず
お手伝は暇をとって出て行った。
朝のカフェを沸かしながら
かえらぬお前を思うと
涙が落ちた。

狂気

娘はかくれて煙草を喫う
女中は家の品物を搦撲る
小僧は言付けをきかず
飼犬は外出から帰らず
俺は欲情を持てあます。

空 転

わからない短歌を創る奴
わからない詩を創る奴
わからない絵を描く奴

解らないのは凡夫だと言うが
解った顔をする奴の
解説もあてずっぽうだ。

解っているのは作者と狂人だけ
狂人と凡夫を双肩に負って
地球は日毎うめいている。

孤 独

僕は落下した隕石
周囲になじむことも
馴染ませることもできない。

沈黙

巨額を投じて竣工した
新しい陸橋がこわれた。
エンジニアは請負者をなじり
請負者は鉄材の軟弱をなじった。
鉄材はものを言はないので
決着がついた。

地球を枕に

親父が逝って二十年過ぎた
親父を悼んだあの頃の壮者も土に帰し
俗名を刻んだ石塔が
鬱然と林立した。

私は花を捧げながら
親父から折檻された思出を
あの頃の自分の年齢の吾娘に話し
「おぢいちゃんに花を捧げよう」
と言った。

これから二十年、或は三十年過ぎたら
私もここに眠れるだろう
私の娘は子供をつれて
「おぢいちゃんに花を捧げよう」

と言うだろう

故郷に錦を飾った人
貧困に過ぎた人
詩人も政治家も
同じく地球を枕に眠っている。

「生きていてもいいことはない」
と誰かが言った。
「待ってなさい、いましばらくしたら、貴方もここに来る
資格が
得られるでしょう」

写真屋

一日中お客の顔を写して
気の遠くなる思いでニキビやソバカス
を消し
美人を創りだす。
美をつくることは嘘をつくることで
こんな作業にほとほとあきた。

一塊の土でも耕して
そこに嘘でない自然を培い
その自然の中に己れを埋没したい。
墓標も供花もいらぬ

参詣者もいらない
私一人の世界に私は住みたい。

いつわり

私に別な女が現れたといい
私の恋人は私から去って
他の男に近づいていった。

偽りのない自由な姿は美しいと
私は許してやったが
彼女は安外自分を偽っているのかも知
れない。

花が咲き、散っていくように
私等の恋も終わった。
泣いていた小鳥の声も
季節と共に遠ざかった。

忘却の塔

八卷 耕土

いつよりか 時を忘れた大時計が
寺院の塔に停っている

卷舌の日本語で説教した
メキシコ系の神父も

知らぬ間に去った

風の便りに

若い修道女と 遠い国で
スイートホームを築いているという

電飾のアーチに憩うた

「彷彿う聖者」の砂像は

捧げた二世少女の希い空しく

セーラの風に乾き

砂嵐と共に

もろくも崩れ去って了った

いく度か

卉苑のジャカラランダは

春愁の彩に咲き 夕べは

惜春の風に散った

今日も若い童貞様が

咲きそめた火焰樹の蔭で

親を知らぬ園児らに
火の神ツパンの童話を聞かせている

公園の樹群に立つ
忘却の時計塔の下で

ミシリツカード
山 川 百合子

暑い日向で何時間も働く
それは都会の人にはわからないこと
とりたてのリモンの香りを味わうのも
都会の人にはわからないこと
ミシリツカード
それは子供のみつけた言葉
とてもおいしいよミシリツカード
子供は巧まずして素的な言葉をみつける

暑い暑いどうにもならないときは
リモンはあまり強すぎる
ミシリツカードを飲めば
生き返ったようになる
私はこれを飲むたびたのしくなる
そして田舎に住むことの幸を思う

哀れな女

マリアの夢をのせて
其白い棉の波は
陽に輝いている
哀れな一人の女マリアよ
この棉を摘んだなら
なつかしい母の待つ故里
ベルナンブコへ帰ろうと
あれなに楽しみにしていた
貧しさのためからだを売るようになり
いつの間にか飲みはじめたピンガ
荒んだ生活
酔っぱらっていても
口にするのは故里のことだった

そのマリアは
裏白にひらいた棉を
目の前にして病気にとりつかれ
病院へとはこぼれた
どうせ癒らぬ病気とわかって
亭主は若い女を引き入れる
そんなこととは露知らぬマリア
亭主が見舞ってくれるのが
唯一のなぐさめなのだ
命の消えるその日まで

あの真白い棉の波を
夢に見ることだろう
哀れな女マリアよ
マリアの夢をのせて
真白い綿の波は
今日も陽に輝いている

じだらくになりはてた 横 田 恭 平

おのれはじだらくになりはてた
それはつまり
痛切に生きているということかも知れぬおのれはおのれ
のからだ以外に
何も持たない
水を弾いて寄せつけぬ皮膚をもつ身体
少なくとも、これこそおのれの身体
と言える身体以外には。
こんな男が
世の中の何に関わることがあろうか
おのれはじだらくになりはてた
たいへん荒っぽい部屋に住み
窓の外にサルビアが五六本
一年中赤い花を咲かせている

サルビアの花にはいつも蜂鳥がぶんぶん時は風よりも早く

そのあたりを過ぎ去るようだが

おのれは関わらない

荒っぽい部屋で

無限の方をながめている

それからおのれの存在を少しばかり

鮮やかにするために、体操する

それからだれも書いたことのない

詩や小説を考える

ところで、ある小雨の降る日

くだものの袋を貼っていると変な物音をきいた

ふと見ると、隅の寝台の上に

いつ来たのか、黒いとがったやせ犬が

ぬくぬくと寝込んでいる一

ずいぶん長い間そうしていたにちがいない

おのれは顔をしかめて箒で叩いた

残り惜しそうに

犬は雨の中へ走り出た

なんと思っただか、振り向いてわらった

旦那／旦那の痛切な生き方ってやつに

たんのうさしてもらいやしたよ、へへ

石橋農園にて

八月はじめの

白いあたたかい光りが

農園の隅々までひたしている

観賞植物の栽植は

広表七アルケール

松柏、もみじ、銀杏、つばき、椰子類

など

そして、今ぞ多彩目を奪う

久留米つつじの花ざかり

天保以降百四十年の伝統を誇るこの名

花は

千九百六十一年、園主によって

種子によってブラジルへ移された

爾後三年の観察と周到な管理

種子によって得た四百種を淘汰し

現在栽培の優品八十種を得た

農園に栽植本数は百万本

すでに何十万本の苗が

ブラジル各地へ向け発送されている

つつじは、その移されたところ

で多くの人たちを仕合わせにしている筈

である

今日、僅かばかりの詩を書く人たちが
吹き寄せられたようにここに集まった
この結構な世に
取り越苦勞のたえない人たち
満開のつつじの群落を去りがてに
と見こう見している

自分は

この粗い風土の邦に来て観賞樹特に
つつじを育て広めることを一生の仕事
とした

一人の永遠の感傷児の
苦難と忍耐の歴史を考える

つつじは人間のところに関わらない
ただ一心に花びらに陽をあつめている

〓一九七〇年〓

イタペチ村

糞尿のいっぱいつまっている自分は
それゆえに
はるかな秀麗な山嶺にあこがれる
イタペチの嶺、スザノの野に仰ぐ嶺
だがあの秀麗な山も
近寄ってみれば
糞尿の気が漂うているかも知れない

ある日、自分はあこがれにのって
その嶺を越えて行った
新しい村がそこにひらけていた
鉄道線路がひとすじ
解怠の思いに光っている
いやとり付けない信念のようにのびて
いる

小さい停車場がある
小学校がある

村はあかるく、ひろく
いろいろのくだものが植えてある
イタペチ村

なんといい名前の村
なんと素暗しい村

まだ未開拓の山野がみえる
そこには椰子の樹が林立している
鹿も棲んでいるという

村人はみな再移住の人たち
その荒れはてた掌は

あまたたびの挫折をものがたり
それゆえにこそ何人の掌をも
潤然と握る

書かない小説家たち
うたわない詩人たち

自然が矛盾だらけであろうと
人生が無意味であろうと
無限の前で背伸びをする

樹木の呼吸を呼吸して生きるからに
人と人とのおのずから借り合う魂があ
って

洞察と企画と

真剣な、ややはげしい労働の日常に
何か充溢するものをまさぐるのだろう
久しく自分にくすぶっていた
衰弱と散漫は
乾いた道路の上で蒸発した
長く忘れていた何を
自分は思いだしたというのだろう

イタペチの村は白く光っている
あの空の高さに
人々は自分たちとその集まりの
可能を信じている
冒険者たちにそれはゆるされることだ
そして自分になしみはあつた
一つの小説、一つの詩を書こうと
意欲するときの
あの抑えがたい、新鮮な
ゆえ知らぬかなしみがあつた

註 イタペチ村は、私の詩の中の村としてだけでいいのだが、実在
する。サンパウロ市から四十五キロ、ヅトラ公道の右側、イタペチ
山脈の麓にひらかれつつある村、モジ都管内

不賢の場合

ある日

すたすたと関を出て行った男
一体どこの涯で野垂れ死んだろう

賢者は野垂れ死ぬ

なんとロマン派好みの終着

羨むなかれ、吾等不賢にこそ

馬糞を枕に

行倒れる資格があろうもの

家族は賑やかに出て行った

つめたい、独りの朝食

窓から痛い外光をとり入れ

生葱の白身の

つんとくる清冽を嚙んでいる

恋人たちは

若い恋人たちは
たえず手を執り合い
頬を寄せ合っていた
まるで、そうしていなければ
お互いの誠実が
すぐにもけしとんで了う
懸念があるかのように

歯を欠いた男

歯を欠いた男
たしかに斗った男
なお斗っている男

誠実、朴納
放埒、不逞

世にありふれた美德の
どれをも見受ける面構え

求めたゆえに
失ったか
歯を欠いた男よ

めらめらと

苦悶のようなものが

あふれ出てくる

ほとんどうつくしい

空気に就いて

空気の不思議を

だれも考えないのは不思議だ

他の星にはそれがなく

地球にだけそれはある

そのゆえに

地上に生命の奇蹟があり

樹々は花咲き

人は歩きまわる

生物のいない永遠は

どんなに索漠たるものであるう

星々の中で

地球がもつともうつくしいことを

だれも考えないのは不思議だ

分身説

曖昧なもの同志

欲望の腹をせり出して

大男が突立っており

糞尿のつまった自分が並んで立つ

月があがりかけ

畑の苗物共は蒼く沈みこんで了った

大男は不機嫌に

また軽蔑するように

じろじろ畑をながめ回す

大男の意中を付度する必要がどこにあるろう
なんで二人がこんな微妙な位置にあるかも
いらぬ詮議だ

極めて自然に自分は考えた

こんな曖昧無類の大男の終焉は

樹木も土壌もゆらぐ

大擾乱をまきおこすのではないかと

もちろん万物は関わり合っており

それに悪意に盈ちている

腐敗の中の一匹の蛆といえども

静謐な死などのぞめないのだ

河流について

おとろえた川がながれている

人はその岸にたち

川の意志と運命を考えた

川は、ふしぎに人のところを惹く

その不確かのかたちで

なんとなしに

低い方へながれて行った

それはどうにもならないことであつた

西を向いても

東を向いても

こういう精神は瀰漫した

で、人々は夕餉の卓で

この結構な時代の恩恵について

たとえば蹴球選手が髪を伸ばしはじめ

たこと

などについて

優美に語り合う習わしをもつた

災害は

災害は

たくらまれてやってくる

路ばたに

いやらしく盛りあがった

ラバペー蟻の巣

甲羅を経た自然科学者程にも無雑作に

白銀の尿をそそいでいる男がある

巣は溶けくずれ

匿された無数の白い卵が

無残に露出する

蟻共はただ

あわてうろたえて

人間である

男性である

口巾たく、精神などと呼びならわす

そのもつとも深く暗い底のあたりに

とり付いてあぐらをかく

嗜虐性の全能幻想

憂愁の眸をあげて

男は

けだるさに鈍光る世界をうちながめる

透蚕（すきご）の詩

近頃、頓に心をいためることばかりだ
たとえば

行き過ぎる少女の小鼻の脇に
にきび一つを見出したときなど

少女の羞恥を

おのれの羞恥にするということでない

少女のしなやかなからだが

こたえて来る、長く単調な、又は荒々しい
性の季節に耐えるために

もはや脂肪を貯えているということとは
なんといたましいことではないか

おのれ世のさい果てに

虫けらのように這いつくばって

来る日も来る日も

なにかものがなしい漂茫としたもの
の中に

身を置く気配

宿縁の、袖すり合う

篤い情けとうすい情けは

彼方の山脈（やまなみ）の

日の出よりもおろかにやさしく

あまつさえ

事古りた性の遺産を身につけて
いらいらと何事か望んでいる人々であ
る

なんといいらしい景色だろう

山河よりも

雲海よりも

もつと漂茫として

つみかさなるものの中で

おのれ白くものういからだを

透蚕のように透かせている

樹の情操は

なんとなしに

春の到来をかんじさせる

八月はじめのあたたかい日

ふとスザノ公園を通りすぎると

つつじの幾群れが今を花ざかり

イペが一本咲いている

葉一枚ない枝頭に黄花をかざり

まことに漂蕩たる風情

植物の性は斯くあるのだ

樹はいま、みずからの価値を
ゆるぎないものに行っている

おのれなんともほしいままな性（さが）をもち
透明になって
樹のなかに入る

湿度ある空気が
つつしみ深いいのちの肌をもてあそぶ
変貌を、いや変質を唆かしてやまぬ
豊醇な日光

時間も何もない白い忘却のはてにいる
さみしさ、あたたかさ
はるかに、いとほるかに
思慕のようなもの
祈念のようなもの
哀愁のようなもの

すなわち
樹の情操は
おのれの情操であるかを考えていると
このうつけたよれよれの男を訝か
靴磨きの黒人少年が
おちさん磨こうか
と寄ってきた

煙

無始無終また秋風の白く立ち………芳賀裸人

白い風

疎林を過ぎ

わが身を過ぎる

彼方の山脈へまでも

過ぎゆくか

かくもあきらかに

ものみなが存在するはなにごと

見はるかせば

祈り、澄む

目路のはて

煙一すじ

あのあたりは荒蕪地で

あれは製紙場の大煙突からだ

常なく、白く

冷やかに立ちのぼる。

碧いものを

いよいよ碧く沈着せしめて

このあきらかな時刻の眺望に

粗雑なおのれ、恥もなく

あの丈低く温良な山脈の

やや羞恥をふくむ清潔を盗もうとするのだ

雲に就いて

たとえば

市街や、村落や

はるかにひらいた平野の景色など眺めるとき

またそれらを

写真やテレビの画面で眺めるとき

まずそれらの上に気ままにうかぶ

雲のすがたを捉える

雲はおのがじしのすがたと感情をもち
その感情は地上の風物に呼応するかの
ようだ

愛憐の思いに堪えるように
なにごとか予告するように
いつも怜悧にちかちかと瞬いている

そのやわらかに微光するものの下に
やや遠ざかる気配に
はつきりと識るされてくる

地上の風物

ある日、この惑星の表面に
ふとも湧きでた生命どもの裔が
健気にも久遠を夢みて身づくろいして
いる
そのすがたは

雲よ

つまらぬ浮遊のものよ
そして何ということだ
つねに私の気まぐれな想念に
関わりをもつことをやめぬ
ふしぎなものよ

セー広場にて

古めかしい

威圧してくる大伽藍の前
これはまゝた、いと謙虚に、ひっそりと
小さな石標が存在する
州内各地への距離基点
だが、いくらかの感懐を以て
この出臍然たる石標を眺める人もない
この流れるような群衆はどうだ
みな生きて歩き廻っている
何か大切なものを
遠い時間の中に置き忘れ

それが何であつたか思いだせぬという
面持で

なにごとか異なる未来を期待して
繁栄する街角を曲るのだ

悔恨と希望、失意と得意の交錯する
人生の街角

行きずりの人々の風格は沈静で
概ね秩序により親しむ

百年後には
彼等はだれもいない

光りを透かして

一

巨大な建築の上に白くひろがる
無限の空間

その空間に揺曳する永遠の時間
こうした世のさい果てに身を置いて
かの秩序ある流れを眺めている
いや、もはや流れる群衆を見ない
おのれを含む一つのなまめかしい
生命の系譜を眺めている

生きているかぎり

煩惱し、愛慾し

常に何事か望んで止むことのないもの
性に発し、性を発するもの

思うてもみたまえ、虹のように懐しい
もの

それは原初の湿潤からつづく
一つの悲哀の系譜
いつの日か宇宙に拡散することがある
うか
表わし難い、随分荘重を思想に痴れて
それを眺めている

夕立雲の詩

米沢幹夫

夕立雲

なんたる素晴らしさだ
残陽の空を区劃して
不可思議な神秘がはためく

むく むく と

層雲の渦は

大胆な野望と情欲をひめ

巨きな触手が

地平を掴み

激しい感情を叩きつけようとしてもがく

疾風、稲妻、雷鳴、

渾然一体

私は血みどろになった心臓を
しっかと抱きしめる

七月の詩

七月……………

喪式のあとのようなこのうつろさ
最上のものを失ったようなこの哀しみ

七月……………

私の心に灰色の黄昏の帳が下りてくる
私の心に淋しい梵鐘がひびいてくる

七月……………

凋落しつくしたこの自然の残骸に
こがらしはなおも冷たい廃虚の目をむく

七月……………

ああ、私はこの深秋の底にひざまづいて
心からなる祈りを捧げずには居られない

六月は

六月は
ザボンの実が
熟れて落ちる

自然の中へ
あまずつぱい匂いが
いぶし銀の
ぼかしをつけてゆく

六月………
空は冷えて
私の心は無一物

太陽は
歪んだ微笑を
大地へ投げつける

魚

私は名もない一尾の魚である

社会という海の真中で
いつも生活の波にもまれながら
芥のように漂っている

ときどき、大きな船が
及びもつかない世界を積んで通る

何処かに虚栄の城廓が建っているのだ
ろう

誰かが、幻滅の槌で
一生懸命その扉を叩いているのだらう

貧しい鰭で支えている生活圏
その向こうでふるえている風景

私は名もない一尾の魚――
社会という、邪悪にとまどいながら
あの燈台の中にしまいこんである
遠い夢をとりかえそうとするのだ

風車

風車は

空の番人である

美しい岡を背景に

詩人のような気取りかただ

時折り、風は

撫でるような優しさで

吹いて過ぎる

カラ、カラ

ああ、カラ、カラ

風車は

空の番人である

ひねもす

毀れかけた楽器を

鳴らしつづける

霧

霧の海は人間を神秘にする
いくつものシルエツトが
出たり消えたり
まるで、不透明な硝子に囲まれた水族
館だ

重々しく垂れ下る街路樹
私は、
奇蹟を求める潜水夫のような足どりで
何処までも歩いて行く

ぼう、ぼうー
工場の始業の笛が鳴る
いや、

あれは近海航路の船の音かも知れない
霧の海………
時折り、霧の持つ神秘性が
人間を夢遊病者にする

水車のある風景

岡のふもとにある

忘られたような水車小屋

牧場の径は昼顔の花でいっぱいだ

遠くからささやかな流れがつながり

空は一すじの色にすんでいる

ごどり、ごどり、と

牡牛のようなたくましさを廻る水車よ

遥かなる街の騒音も

此処まではとどかない

時折り、小鳥たちが

こぼれた糞を啄みにくるのみだー

誰かが、こんな風景を絵に書いている

その背後で私は

それらのものを詩にまとめようとして
いる

心の中にある風景

私は心の中に一つの風景をもっている
その風景は絶えず私の心を蝕みながら
遠い過去へと運命の車を押して行く

静かに眠っている山脈

きらきらと流れかがやいている川波

松の疎林……………

青い田圃……………

白い砂原……………

そこには平和な部落がある

貧しい藁屋根がある

鎮守の森を囲んで草花が咲いている

梧桐の葉を1 ゆすりながら

そよ風が吹いている

老いたる母親は今年も

遠い外国に住んでいる息子のために

裏山の地藏堂へ日参をつづけていると言う

小さな丘で囀っている小鳥たちよ

私はあなたたちの歌がききたい

運河の岸で廻っている水車よ

私はおまえの単調なひびきがききたい

何所か漕かなとこ

悔恨の刃で抉られながら
おろかな屍体となることを願いたい

地球の裏と表の感情をつなぐもの
追憶の底にうずもれてゆく映像の襞

私は心の中に一つの風景をもっている
その風景はたえず私の心を蝕みながら
訂正の汚点でいっぱいになっている

何処カラ来マシタ

蔵光寺草太

瓢瓢ト

宙ニ浮かンダ

コノ地球ハ

一体全体

誰ノモノデス

ソシテ

ココ栖ム

虫ケラハ

人間ハ

イツ

何処カラ来マシタ

何処へ往キマス

劫初ノコロ

アカアカト

渺々ト

ウツウツト

ソウデス

火ノ

球デシタ

水ノ

球デシタ

草木ノ

大陸デシタ

鳥獸ノ

棲ミカデシタ

ソレカラ

ナン億年モ

過ギテ

ホンノコノ頃

人間ノ

花盛リデス

ソレニシテモ

ココ栖ム

虫ケラハ

人間ハ

誰ノモノデス

ソシテ

飄々ト

宙ニ浮カンダ

コノ地球ハ

一体全体

イツ

何処カラ来マシタ

何処へ往キマス

カラツポ袋

句友杉里を悼む

杉里（すぎり）ハ

無形ノ

宝ヲ

ツギツギ

貯メタ

謡ニ踊リニ

才茶ニ才花ニ

俳句

ドレヲ

撰ツテモ

貯メテモ

荷ニナラナイ

杉里ハ

ホントニ

多芸多才デ

采ル日モ

采ル日モ

大キナ

袋ヲ

提ゲテイク

ミテモミエナイ

無為デ

無策ノ
カラツポ袋

杉里ハ

裸デ

享(も)ラツタ

タツタ

一度ノ

天寿ヲオシミ

オノレヲオシミ

大事ニ

大事ニ

八十二才デ

ポツタリ往ツタ

ヒトリデ遷ツタ

あとがき

「コロニア文学」創刊号（一九六六年五月発行）への詩の応募は、僅かに三篇（三名）であった。コロニア詩壇の不振は底を突いていたと言える。

一九七〇年、思いたって同好ベテランに広く呼びかけ、「詩話会」結成を提唱、横田、可児、高原、諸氏の協力を得て、同年三月「サンパウロ詩話会」が発足した。以来、「スザノ詩話会」と交互に、あるいは合同で、作品発表、研究会を開いて今日に至った。その後段々とベテラン、新人の参加を見、現在、最高出席者数が十五名に達する程の会に発展した。

従って、「コロニア文学」の詩欄も号を追って盛況を呈し、最近号には、三〇篇もの作品が発表されるようになっていた。「詩話会」の発足時、私は「もし順調に会が成長したら、時期をみて合同詩集を刊行したい」と述べた。当時、半分は景気づけくらいの気持ちで言ったのであったが、二年後の今日、その編集を担当するに当たって、一種の感慨をおぼえている。

これまで、コロニアには、単独で、または、二、三人共同で著わした詩集はあるが、多人数の合同詩集出版というのは、初めての試みである。これは、コロニア文学史上でも、かなりなポイントを占めるものと思われる。

本書は経費の関係から、また各作者の謙虚な気持ちから、詩集としては異例の経済編集になっている。だが、担当者としては、なるべく体裁をととのえ、また鑑賞をさまたげないよう配慮した。例えば、上段から下段にまたがる場合、草間の空白はその所在を小字で示しておいた。

体裁は至って簡朴であるが、各詩篇には、懸命真摯な詩魂が

宿っている。あえて江湖の一酌をおすすめする所以である。

|| 武本由夫・記

「叢」編集委員会

(A・B・C順)

委員・・・・江尻潤

||・・・芳賀芳朗

可児三平

志野明子

高原純

(編集担当)

武本由夫

横田恭平

コロニア合同詩集

「叢(くさむら)」

一九七二年八月二五日印刷

一九七二年九月一日発行

編者 「叢」編集委員会

発行者 コロニア文学会

Gremio Literario. Conia

Rua Sao Joaquim. 381 Sao Paulo

印刷者 パウリスタ美術印刷株式会社